遺伝カウンセリングにおける臨床心理学的アプローチと〈遺伝子なるもの〉

山　本　喜　晴

1．はじめに

筆者は臨床心理学を専門とする立場から、京都大学医学部附属病院での遺伝カウンセリングに参加してきた。遺伝カウンセリングでは、遺伝学の発展によって明らかになった専門知識を活用した情報や技術が、クライエントに提供される。遺伝についての専門知識は、染色体や遺伝子といった微視的に発見された物質に関する研究に基づいているため、遺伝カウンセリングは生活感覚からは離れた非日常的な場である。「かえるの子はかえる」といった素朴な日常の感覚の中にある遺伝理解では解決できない問題を抱えたとき、人々は遺伝カウンセリングの場を訪れる。そして、その来談動機には遺伝現象にまつわる特徴的な心性があるように思われる。

一方、遺伝学の発展によって明らかになった遺伝の詳しい仕組みや、遺伝に関する医療技術は、遺伝カウンセリングを訪れる者のみにあてはまるものではなく、人間全てに当てはまる。現在、心理臨床において心や体を扱う際には、たとえ普段の生活では直接見ることも触ることができなくとも、染色体やDNAといった遺伝物質の意味を無視することはできない。それらは、常にわれわれの身体に宿り、あらゆる行為や思念につきまとう。心理臨床が人と人との生身の出会いを重視するように、身体は心を扱う心理臨床においてきわめて重要なテーマであり、さまざまな角度から身体について検討することは、心理臨床において専門性を発揮する上で有益なことであろう。そこで、本稿では、遺伝カウンセリングにおける臨床心理面接を出発点として、そこから、遺伝という身体現象と心の関係について考察することを目的とする。

2．遺伝カウンセリングと未知

初めに、筆者が遺伝カウンセリングにてクライエントと1対1の臨床心理面接を実施した際に体験した、印象的な言葉を取り上げ、その言葉から遺伝カウンセリングに特徴的なクライエントの心の動きについて考えたい。ここで、クライエントが語った言葉に注目するのは、心理臨床において語りが重要であることだけでなく、遺伝カウンセリングが言葉と深いつながりをもっているからである。なぜならば、遺伝カウンセリングは遺伝子についての専門知識が扱われ、現在、遺伝子と考えられてる物質はDNAを中心としており、DNAが遺伝情報を担う仕組みは言葉になぞらえられるからである。クライエントの発する言葉と、遺伝カウンセリングの場を大きく特徴づけている遺伝子という言葉が無関係ではないことを念頭において考察をすすめる。

さて、遺伝カウンセリングの場を訪ねるクライエントは、さまざまな要因で遺伝という現象に向かい合わなければならなくなった人々である。親族の病が他の人に遺伝する可能性を知りたくなって訪ねるのかもしれないし、自分の病が誰かに遺伝するものと知った上で、より正確な知識

を得るためにやって来るのかもしれない。或いは妊娠・出産の異常をきっかけとして来談する場合もある。こうしたきっかけによって遺伝カウンセリングの場を訪れたクライエントは、医師や遺伝カウンセラーによって遺伝医療の最新の見解を得ることになる。医学的な裏づけのある正確な情報によってクライエントの抱えてきた問題は整理されたり、解決される。だがその一方で、クライエントは最新の遺伝学の成果をしても分からないことがあることを知らされる。例えば、遺伝病の中には現代の医学ではこれといった治療法がないものもある。また、クラインエントはしばしば生まれてくる子どもが健常であるかどうかを尋ねるが、生まれてくる子どもがどのような子供か、完全な答えは実際に生まれてみるまで得られない。まして、その子どもの生得的な特徴が、一生の間にどのような意味や価値を持つのかということになると、もはや医学の領域を超えた問いのように思われる。遺伝カウンセリングの場を訪れるクライエントは、こうした現在の医学の成果と同時に限界も思い知ることになる。クライエントは、いわば現代の遺伝医療の最先端に押し出され、そしてその前方に横たわる途方もない〈未知〉を、自分自身のものとして眺めなければならなくなる。本来ならばこれは、人類全てにとっての〈未知〉であるが、当事者であるクライエントはそれを自分個人のものとして味わうことになる。

筆者が出会ったあるクライエントは、遺伝カウンセリングに付きまとう〈未知〉をどう受け止めるかをめぐって、示唆に富む言葉で表現した。このクライエントは、親族の先天的な障害が自分の子どもに遺伝するかどうかを知りたくて遺伝カウンセリングの場を訪れた。そして、医師から障害が遺伝する確率について説明を受けたあと、個別の臨床心理面接で次のように語った。「先生（医師）の説明は分かったけれども、結局完全には分からない。つまり分からないということが分かった。それで納得がいった。」

このクライエントが得た情報は子どもが障害をもつ確率であって、100%という確証は得られていない。確かに、実際に子どもを産むまでは、その子がなんらかの障害を持っているか、持っていないかは現在の医学でも分からない。にもかかわらず、このクライエントは医師の説明によって納得し、臨床心理面接でそのことを確認して帰っていった。クライエントは医師から正しい説明を受けて十分納得しており、また、臨床心理面接の様子からクライエントの心理状態が比較的安定したものであることが分かった。そうすると、このクライエントは心理的援助を受けずとも特に問題なく遺伝カウンセリングの場から去っていったのかもしれない。かといって臨床心理面接がクライエントにとって全く無意味だったというわけではないだろう。この面接にあらわれた語りは、医師に直接語られる質のものではなく、臨床心理面接が設定されて初めて語られたものと考えられる。それは医師から提供された情報を、医師のものではなく、自分のものとするために咀嚼する作業であった。この場合、臨床心理面接は遺伝現象へのクライエントの主体的関与を引き出したものと思われる。

遺伝カウンセリングが単に専門家のもつ正確な知識示すためだけのものならば、遺伝カウンセリングにおける〈未知〉の領域は、医師などの情報提供者にとっては責任の負えない領域であり、そこに向き合うクライエントはひたすら孤独に陥ってしまう。遺伝カウンセリングでは、発病の確率、病が遺伝する確率、ある遺伝病の保因者となる確率など、内容に若干の違いはあるが、確率をめぐるやりとりは頻繁に生じる。数値の上では同じ確率を伝える場合でも、クライエントのおかれている状況によって、またクライエント自身のあり方によって受け止め方はさまざまであっ

て、ある確率がクライエントに安心をもたらす場合あれば、さらなる不安をかきたてる場合もある。それは未知なる領域をクライエントが主観的にどう体験するかにかかわっている。ここでとりあげたクライエントは、子どもが障害を持つかもたないかは分からないということを理解したうえで、なお、「分かった」と言い得た。この言葉の背後には、〈未知〉を自分の生のうちに認め、生きることの重みを自ら引き受ける姿勢がうかがわれる。それは親族に障害を持つものがいる、というこのクライエント自身の生であり、遺伝というきっかけによって他者の障害と関係を持つことになった生である。筆者は臨床心理面接によって、このクライエントの力を目の当たりにしたように思う。それは遺伝カウンセリングにおいて、深い〈未知〉に直面してしまったクライエントたちが、衝撃を味わいながらも、〈未知〉を自身の生の内に認めることで、面接を終えるときに行き着く心境を、このクライエントは指し示していたように思われる。この心境に行き着くまでの道のりをクライエントとともに歩むことが、心理臨床の専門家としての役割であると考えられる。

3．遺伝子と「俺の存在」

このクライエントは、医師の説明によって「分からない」という事態に直面しつつも、「分かった」という手ごたえを得た。それを成しえた要因として、「分からない」事態の内容、クライエントの心の安定具合、周囲の支え等が関わっていると考えられる。全てのクライエントがこのような安定感をすぐに示すわけではない。また、自身の生の重みをすぐさま引き受けることができるとも限らない。時間のかかることもあるだろう。そもそも老いや病いに直面すると、たとえそれが生の必然と分かっていても、突然あらわれた〈未知〉の感覚に、われわれは戸惑い、自分の基盤がゆらぐ思いを味わう。〈未知〉を体験し、今までの自分のあり方がゆらぐ体験は、心理臨床一般につきものであるが、遺伝カウンセリングにおける〈未知〉は、身体の核ともいうべき遺伝子の仕組みそのものにかかわるため、クライエントは自身のあり方を根底から見直し、生まれてきたことそのものを見つめ直さなければならなくなる。

たび重なる妻の流産の原因が、自分の染色体の異常であることを知ったあるクライエントは、子どもができる可能性について知るために遺伝カウンセリングを訪れた。医師からは子どもができる可能性はそれほど低くないことを告げられ、幾分安心したようであった。その上で実施された、筆者との臨床心理面接では、流産の原因が自分にあることをめぐって、一度妻から責められたことを語った。罪悪感や自責の念を抱えつつ、しかし、染色体の異常を自分の責任とすることには納得のいかない気持ちを語りながら、クライエントは「俺の遺伝子を否定することは俺の存在を否定すること」と語った。

このクライエントが抱えているのは、身体を構成するほぼ全ての細胞の核にある染色体の構造の異常であって、厳密には遺伝子の問題ではないのだが、クライエントは「俺の遺伝子」という言葉を使った。ここでは生物学上の言葉の正確さを問うよりも、このクライエントにとって「遺伝子」という言葉がもつ意味を理解することが重要であろう。このクライエントは「遺伝子」という言葉を、自身の存在の基盤として用いたようである。流産の原因にもなった自分の「遺伝子」に対する否定的な感情は、妻に言われるまでもないことであろう。しかし、流産をもたらした「遺伝子」は自分そのものの基盤でもある。染色体の異常は、たまたまこのクライエントの身の

上に生じたものであるが、生命の大きな流れの中において、異常は染色体のレベルでも遺伝子のレベルでも、その構造上、ある一定の確率で必ず生じる。それは、クライエントがこの世に生を受ける以前、個体として成立する以前の精子と卵子であったときに、その卵子と精子が細胞分裂によって形成される過程で、偶然起きたと考えられる異常である。そこで生じた異常の意味を問うことは、全くこのクライエント個人のことでありながら、有性生殖の仕組みや細胞分裂の仕組みそのものに関わっており、1人の生を超えた途方もない出来事でもある。

幸い、クライエントには今後子どもができる可能性がそれほど低くないことが伝えられた。このことを頼りとして、クライエントはこれからの展望を持てたようである。だが、クライエントは、このクライエントのいう「遺伝子」について知ることによって、自身の生を新たに意味づけなおす作業を体験したようである。こうした作業は心理臨床一般につきものであるが、それは、このクライエントの言葉に表れているような自己否定も招きかねない。それは、死への接近として体験されうる。このクライエントの場合は子どもの流産というかたちで、死を体験している。「俺の遺伝子」に異常があることを知ったことで、自身の生を新たに意味づけなおす作業。それは、葛藤というかたちをとった、「俺」と「俺の遺伝子」との対話として、繰り広げられるようであった。そして、その対話は生殖や生き死にといった、存在の根源にかかわる物語を示していると考えられる。

4．〈遺伝子なるもの〉と「死の欲動」

先述した、遺伝現象をめぐるクライエントたちの言葉とそこにあらわれる心の動きは、われわれ人類が遺伝現象をどのように理解しているか、遺伝子によってなにを思い描くか、ということにも繋がっていると考えられる。遺伝カウンセリングにおける援助者は、クライエントやクライエントを取り巻く人々の遺伝子が示す情報が、医学的みてどのような特徴をもつのか、その個別性に基づきながら判断する態度が不可欠であるが、それと同時に、遺伝という現象をわれわれ人類がどう受け止めているのか、今までどう受け止めてきたかを理解し、その上で、クライエント個人が遺伝現象をどう受け止めているか理解する、という態度も有効であろう。

クライエント個人を理解する上で、ものごとの個人的な次元だけではなく、普遍的な次元を踏まえることは、心理臨床でしばしば重視される態度である。例えば、クライエントの個人の母に関する語りの背後に、一人の母を超えた、より普遍的な概念である〈母なるもの〉をセラピストが見据えておくことが、治療的展開をもたらすことがある。〈母なるもの〉は生身の母そのものだけではなく、われわれを養う自然の摂理、あるいは食糧を蓄え、酒を醸成させる壷のイメージにこめられることもあり、それらの共通性を理解しておくことが、治療上大きな意義を持つことがある。同様に、遺伝子についての語りの背後にも、個人の遺伝子そのものを超えた、〈遺伝子なるもの〉を見て取ることができ、遺伝カウンセリングにおけるクライエントの心の作業を理解する手がかりになると考えられる。この〈遺伝子なるもの〉は、先にとりあげた2人目のクライエントの言葉にみられたように、医学的な意味での遺伝子だけでなく、クライエントの主観的イメージとしての「遺伝子」をも含みうる概念である。

もっとも、医学および生物学においても、「遺伝子」という言葉の示す意味はさまざまに解釈されているようである。例えば、ドーキンスDawkins, R.はその著書『利己的な遺伝子』によっ

て、遺伝子を種の設計図とみなす従来の視点に代わって、種を遺伝子の乗り物とみなし、種の増殖ではなく遺伝子の増殖を生命現象の本体ととらえる新しい視点を提供したことで有名である。ドーキンス自身、「遺伝子について万人の賛意を得られる定義はない。」（Dawkins, R.,1989/2006）とことわっているが、遺伝子についてのさまざまな定義を検討し、並存させる立場をとったことが、生物学における新しい見解をもたらしたといえる。もっとも、ドーキンスの使う「遺伝子」という言葉のうちでは、表現型から類推する遺伝因子と、分子生物学でDNAの塩基配列から推定する遺伝因子とが、安易に混同されている、と批判する声もある（中村、2006）。確かに、ドーキンスが専門とする集団生物学における遺伝子概念と、分子生物学における遺伝子概念とは異なる場合もあるだろうが、ここで〈遺伝子なるもの〉を追及する上では、現代の生物学におけるさまざまな遺伝子概念の差異に厳密になるよりも、遺伝子という概念がわれわれにどういうイメージをもたらしているかを明らかにすることが重要であろう。そのためには、遺伝子という概念が歴史上どのように現れて今に至っているのか、おおまかに振り返ってみたい。

近代遺伝学はメンデルMendel, G.に始まる。メンデルは19世紀半ばの修道院の庭でエンドウマメの交配を繰り返し、それまでおおざっぱに考えられていた遺伝現象に、一定の法則を見出した。そして、遺伝形質は遺伝粒子によって次世代に受け継がれると考え、この遺伝粒子をエレメントと呼んだ。メンデルが遺伝の法則を研究する以前からも、ラテン語で「相続」を意味する「hereditatem」に由来する「heredity」という言葉があり、子供の特徴が親に似るという現象を挿していた。これを生物学では形質遺伝と呼んでいる。形質遺伝という意味での遺伝hereditiyという言葉はすでにあったのだが、形質遺伝に遺伝因子としてのなんらかの物質を想定した点で、メンデルの発想は画期的であった。メンデルが発表した学説は、あまりにも先進的であったために、一度忘れ去られてしまったが、1900年前後に同種の学説が別の研究者らによって相次いで発表され、メンデルの法則が再発見された。

メンデルが遺伝について研究していた19世紀半ばをやや過ぎたころ、チャールズ・ダーウィンDarwin, C.が、メンデルの研究とは別に遺伝物質に関する仮説を発表した。この仮説はパンゲネシスpangenesis（Darwin, C.、1868/1973）といって、遺伝と生物の由来を説明するものである。ダーウィンは人間に飼育・栽培されている数々の動植物の観察の結果、ジェミュールgemmuleという物質を想定した。ダーウィンによれば、ジェミュールとはさまざまな遺伝的性質を担い，自己増殖する粒子であって、生物の各器官に含まれており、このジェミュールが血管などを通じて生殖細胞に集まることで子孫へと伝達され、子孫の体で再び各器官に分散していって親の特徴を発現させる、という。この仮説は現在では否定されており歴史的な意義をもつのみにとどまっているが、ダーウィンが1859年に『種の起源』を著して、それまで少数の生物学者の中にとどめられていた進化論を、世に普及させていることを考えるならば、ジェミュールには、種や生命の起源への思いが込められているといえるだろう。そして人間と他の生物とが連続したものであるという進化論は、人間と他の生物とを厳格に区別するキリスト教によって激しい非難を浴びた。にもかかわらず、その後も遺伝に関する研究は続々と発表され、1889年にド・フリースde Vries, H.がダーウィンの理論を応用しながら、遺伝物質をジェミュールの代わりにパンゲンPangenと呼び、1906年にベイトソンBateson, W. が遺伝学geneticsという言葉を用い始め、1909年にヨハンセンJohannsen, W. がメンデルに始まった遺伝物質を単に遺伝子Gen（英語で

はgene）と呼んで、今日に至っている。この流れにあるように、遺伝子geneという言葉の背景には発生、起源、誕生、生成といったイメージがみてとれる。さらには、遺伝子はダーウィンの進化論に対する教会の反応のように、Genesis（創世記）といった神話的イメージをも巻き込みながら生まれてきたといえる。

その後、遺伝子は細胞分裂の際に観察される染色体上にあるとする説が確立され、現在では、染色体の構成物質であるDNAのうち、タンパク質合成に直接関係している部分が、遺伝子と考えられている。そして、地球上のほぼ全ての生物は、核やミトコンドリア、細胞質基質に含まれるDNAによって遺伝情報が伝達されているということが明らかになっている。ユング派の心理臨床家であるスティーブンスStevens, A.も細胞分裂の際に生じる染色体とDNAの複製過程を、「種の複製の元型」（Stevens, A.、2003）いい、生命における根源的な動き方と促えている。

患者が抱える心の病いの原因を究明する過程で形成されたフロイトFrued, S.の研究スタイルは、生物学における生命の起源や進化を探る態度に近いものがある。実際、フロイトは、患者との面接や日常場面における人間観察から導き出した概念を、たびたび生物学的に検討し、生物学的事実との照合を図っている。その代表的概念が「死の欲動」（Frued, S.、1920/2006）であり、そこには、人間の心の動きを生物活動一般の延長としてとらえる態度がみられる。フロイトは心理臨床や普段の生活のなかで反復されることの中には、例えば外傷性神経症がつらい体験を繰り返し夢にみることや、同じパターンの恋愛関係で破局を繰り返すといった、快感原則から逸脱し、自らを苦しめ続けるものもあることについて考え、そこから、「生の欲動」の対概念として「死の欲動」を思いついた。「死の欲動」は「生命あるものがかつていったん放棄したものの、あらゆる進化発展の迂路をへながら帰り着こうとする昔の状態、生命の出発点である状態」へ向うものである。それゆえ、「あらゆる生命の目標は死であり、翻って言うなら、無生命が生命あるものより先に存在していた」。そして、「死の欲動」は「生の欲動」と合わせて次のように形容される。「有機体の生命のうちには躊躇のリズムのようなものがある。ある一群の欲動は、生の最終目標にできるだけ早く到達しようと、前のめりに突進してゆくのに対して、もう一群の方は、ある個所までくると急いで逆戻りし、特定の地点からもう一度歩みはじめ、そのようにして道のりの長さを延長しようとする。」この早く到達しようする動きが「死の欲動」であり、逆戻りとしてあらわれるのが、「生の欲動」である。

「死の欲動」が導き出されたのは、外傷性神経症の症状など、不快な経験をもたらすにもかかわらず繰り返される、ある種の反復であった。ここで、生命活動の中に反復をさがしてみると、個体の数を増やす生殖活動を初めとして、細胞分裂の際の染色体やDNAの動きも複製であり、反復の一種といえる。フロイトが臨床場面で出会った快感原則に従わない反復を、生物一般の営みの中にも見出すことで「死の欲動」と名づけたものは、〈遺伝子なるもの〉としての観点から捉えなおすことができそうである。

フロイトは生物学の発展に大きな期待を寄せており、「生物学はまことに限りない可能性を秘めた領域であって、まったく思いもよらないような解明が期待できる」と述べているが、もし、フロイトが現在の遺伝学の成果を知れば、病的な反復と死の欲動の起源を、がん細胞の遺伝子に見出したのではないだろうか。がんという病気は細胞の異常な増殖が他の正常な細胞を破壊してしまうことであるが、近年の研究によると、がん細胞のDNAに見られる変異は、正常な細胞の

場合においても増殖にかかわる部位であることが明らかになってきている。われわれ多細胞生物は刻々と細胞分裂という反復を続けなければ生きていけない。しかし、反復は変異によって悪性の反復を生むこともあり、悪性の反復は病として固体の生命を脅かすことになる。

このように反復は良性悪性のいかんを問わず、生命現象とともにある。がん細胞のように死へ直行する悪性の反復も、生命現象の必然であるならば、むしろわれわれの遺伝子によって発現される、たんぱく質の合成や個体の発生といった生命現象そのものが止めることのできない反復強迫であるといえるだろう。そうであるならば、その反復強迫から生じたわれわれの意識、つまり主体の成立そのものもまた反復強迫を本性とする。意識というものは遺伝子に由来する神経細胞などの身体的構造が繰り返し指し示す、反復の動きそのものである。心は実体ではないのであるから、身体という物質の動きによって重ねて描かれるひとつの軌跡あるいは印や痕跡のようなものを意識という現象として理解しよう。そして、身体活動の反復では、遺伝子の次元でも神経細胞の次元でも、同じことが繰り返されながら、ときにその中にズレが生じ、そこから新たらしい動きが生まれてくる。このズレは遺伝子の次元では変異という形で示される。〈遺伝子なるもの〉は身体という物質の動きによって示される反復とズレの動きそのものが意識であることを示している。そして、ここから生じる意識の変化は、心理臨床の営みの根底でも生じているのではないだろうか。身体の細部で常に生じている反復と反復損ねとをどう意識化し、なにを感じ取るか、という作業は、遺伝カウンセリングにおける臨床心理面接に限ったことではなく、あらゆる心理臨床面接で行われているようにも思われる。

5．言語としての〈遺伝子なるもの〉

染色体を構成するDNAが、遺伝物質とみなされた後、1953年にワトソンWatson, J.とクリックCrick, F.によってDNAの2重らせん構造が明らかにされたことを皮切りに、DNAやRNAを中心とした分子レベルでの遺伝の仕組みが、急速に解明されてきている。それによって、〈遺伝子なるもの〉の意味は革新された。現在、遺伝子は、染色体を構成するDNAという物質のうち、たんぱく質合成に直接かかわっている部分を指すものとしておおむね理解されている。そこで意味をもつのは、DNAを構成する4種の塩基の配列である。4種の塩基の性質そのものよりも、それらの配列の順序や区切り方が重要な意味をもっているのである。このことからDNAは言葉にたとえられてきた。それは、ある化学反応がDNAからメッセンジャーRNAへの「翻訳」と命名されることにも現れている。このことから、伊藤（2005）は遺伝子を「化学の文字」と呼び、心理臨床家としてクライエントの語る言葉に耳を傾けてきた自身の経験と絡めながら、言葉を語るものとしての人間存在と、科学の発展によってあきらかになった遺伝子との関連に大きな可能性を見出している。そして、遺伝子によって「伝えられるのは文字情報であり、内容物ではない」ことに、「心理臨床における象徴について、その内容を実体として捉えるのではなく、象徴化のあり方こそが意義深いと考え、その観点から言葉に注目してきた筆者にとって、遺伝子レベルにおいてすでに同様のことが起こっていたというこの一致は衝撃的な出会いであった」と述べ、心理臨床の営みの背後にある遺伝子の動きを感嘆をもって認めている。このことから、DNAの構造の解明は、〈遺伝子なるもの〉を言語との関連から理解することを可能にしたといえる。

DNAでは3つの塩基配列の順序に対応して、合成されるアミノ酸の種類が決まっており、こ

の3つの塩基配列をコドンと呼ぶ。コドンの配列は種によって異なるわけではなく、作られるアミノ酸とコドンとの対応はほぼ全ての生物で共通している。つまり、DNAは種を越えて生物全体が共有するある種の符号を示している。DNAのこの仕組みが明らかになったことで、現在ではヒト成長ホルモンのDNAを、大腸菌の中に入れることで、大腸菌によってヒトの成長ホルモンを合成することが可能になっている。ヒトはDNAという物質を媒介として、ホルモン合成という化学反応において、大腸菌をヒトと全く同じようにふるまわせることができるのである。それは、異なる種が同じ化学の言語を使用することにたとえられるであろう。そして、その生物に共通する言葉をヒトが理解したからこそ、それまでヒトの遺体から得ていた成長ホルモンを、大腸菌によって大量に作り出し、薬として活用することが可能になった。これは遺伝研究から生まれた遺伝子工学の画期的な成果の1つといえる。

DNAはその構造が言語にたとえられるだけでなく、言葉を導き出した物質とも考えられる。われわれが日々用いる言語は、サルから別れて、ヒトとして歩み始めた遠い祖先が作り出したものである。そこには、サルのDNAからヒトのDNAへの配列の変更があった。つまり、言語はDNAという生命共通の進化システムから生まれたのである。そのため、言語はDNAによってうまれた生命の多様性のひとつのあらわれとして位置づけられる。われわれが言語を獲得できるようになる要因のひとつとして、脳の構造があり、その脳の構造はDNAによってある程度既定されている。DNAの語りが脳という器官を作り出すに至り、その脳という器官が、ヒトという種において、発声器官の仕組みなどさまざまな要因が重なって、今われわれが用いている言語を作り出すに至った。DNAの構造が明らかになったことでDNAが言語として理解されるようになった、というと言語が先にあったようであるが、本来は、DNAという生命共通の言語が先にあって、それがヒトの言語を生み出すに至ったのである。

このように、DNAの情報伝達の仕組みと、脳の設計図としてのDNAという、2つの点において、DNAの発見によって、言語はDNAという物質として身体の中にかたちをもってあらわれたといえる。DNAはわれわれの身体の中に宿った言葉であり、DNAの発見を言葉の受肉としてわれわれは体験している。

ギーゲリッヒGiegelich, W.（1985/2000）はウィリアム・ハーベイHarvey, W.が1628年に血液循環の概念を発表したことは、自らの中で循環し、「たえず循環しながら常にその源へと戻っていく水」という神話的イメージが、ヒトの身体に取り込まれた革命的出来事であったと考える。同じことは、DNAによって、言葉が身体の中に受肉し、具体的な物質となったことにも通じる。絶えず自分の起源へと戻っていく大きな川のイメージの代表は、ギリシア人の神話的世界観を構成した、世界の果てにあって世界を取り巻いている川、オケアノスである。「かつて人間は、原初の川に囲まれた大地の中に生きており、自分がその川に取り囲まれているということを知っていた。それが今や、人間は、脈打つ生命の流れを、自らの中に抱え込んでいるのである！これは、人間が途方もない重荷を背負っていることを意味する。」

DNAの発見の意味するところも、この「途方もない重荷を背負う」こととしてで理解できる。DNAの発見によってすべての人間、すべての生命に共通する言語が人間の身体のうちに取り込まれた。言語はもともと、情報の伝達のために使われた。言語によって生きていくための知恵や法を物語としてしるし、口承や文字として残されたものが、神話として最初の文学であり法となっ

た。神話を文字として記す、あるいは口承によって伝えるということは、言葉が担っていた運命である。神話はヒトの営みやヒトの抱える〈未知〉について、ひとつの回答を与えてくれる。神話は天地の創造や、ヒトや他の生命の起源、動植物とヒトの関係などを明らかにする。そして、幾世代を経ることで神話として承認され、練成される。その過程は生命の歴史におけるDNAの継承の延長上に位置づけられる。聖書に語られる「初めにロゴスありき」という言葉も、言葉が世界や生命の根源を示す運命を背負っていることを裏付けている。DNAという言葉の受肉によって、人間が自らのうちに抱え込んだものは、神話や宗教の教義を記した聖典であった。そして、いまや聖典は神の言葉として人の外にあるのではなく、人間の内部にある。選ばれた預言者が受け取るのではなく、全てのヒトが身体のうちに生命の物語を抱え込んでいる。中村（2000）は生命を時間の流れを含む1つの物語として捉え、生命を歴史的にとらえる生命誌biohistoryを提唱している。中村は人間の知の始まりである神話の時代に「生命」が重要な役割を果たしていたと考える。そして、現在を生命知のルネッサンスの時期として捉え、DNAを遺伝子としてではなく、遺伝情報の総体であるゲノムとして認識することで、もう一度、自然とヒトと人工の関係を捉えなおして、新しい神話をつくりだす時期であると説く。今やDNAの語る生命の物語は神話として、世界中で支持されている。それは聖典としてあがめられ、遺伝子工学というかたちでときに奇跡をもたらし、新しい技術によって、ヒトがより豊かに生きる道を指し示す。

DNAの発見とそこに書かれている内容の解読は、他の生物の存亡をヒトが決めるという大きな責任が、すでに地球の温暖化現象というかたちでのしかかってきている今日のわれわれの置かれた現状に呼応している。ハーベイによる血液循環の発見によってオケアノスが人間に飲み込まれたのではなく、「オケアノスが人間という生き物によって飲み込まれているのが明らかとなった出来事が、ハーベイによる血液循環の発見だった」とギーゲリッヒが語るように、さまざまな宗教や国境を超えて、環境問題という地球規模での１つの物語、１つの価値観、１つの生命観の共有が明らかになったことが、DNAの仕組みの発見だったといえるだろう。ギーゲリッヒは世界を取り巻く川を人間が飲み込んだ事態を「まるで消化するのが困難な大きすぎる食べ物が胃の中にあるようなもの」と表現する。今まで、さまざまな宗教とさまざまな聖典がヒトの起源や生命の起源を明らかにし、また、ヒトの生きる道を示し、〈未知〉に対して答えを提示してくれた。だが、もはや聖典は身体の外部に書かれた社会的な存在ではなく、われわれ１人１人の身体に書き込まれたものとしてある。このことは、血縁関係がさほど大きな意味をもたなくなり、従来の家族観や結婚観、出産観が解体をむかえている現代の状況とも無縁ではあるまい。遺伝カウンセリングにおいて遺伝情報を扱っていると、家族という概念が果てしなく広がっていったり、逆に家族関係の中であっても遺伝情報は個人に属するものであって、その内容を共有することが憚られたりする。このようにして、従来の家族観の崩壊を体験することがしばしばあるが、それはDNAによって示されるこの新たな物語に由来するものと考えられる。そして、われわれはこの大きすぎる食べ物を消化すべく〈遺伝子なるもの〉との対話を繰り広げ、その結果、社会の中に遺伝カウンセリングという場を生み出したのである。

6．受肉した言語と受肉されない言語との対話

「消化するのが困難な大きすぎる食べ物」としての＜遺伝子なるもの＞を消化する試みのひと

つとして、構造主義の言語観があるだろう。われわれの言語は身体の中に完全に宿っているわけではなく、言語は身体におさまりきらないもの、身体からはみだしたものとして理解され得る。受肉した言語が発見されたからといって、人間の言語が、ひいては人間の存在そのものが、物理的な身体におさまりきらない存在である事実が変わるわけではない。言語はわれわれがヒトとしての一歩を踏み出してから、長い間に渡って、育んできたものである。それは個体の中にあるものだけでなく、個体と個体の間に存在する関係によって支えられ、またヒトが文字を発明してからは、読み書きという伝達手段によって徐々に作りかえられてきた。このように言語を構造としてとらえるならば、言語は身体の枠外にもひろがったものであり、DNAの身体性を超えたものであることが明らかになる。われわれの心は身体に規定されているだけでなく、言語によっても規定されていることを考えるならば、身体（DNA・アミノ酸・たんぱく質・細胞・神経）によって生み出される心の次元とは別に、言語によって存在が可能になる心の次元も同時にある、といえる。

ここで言語を、音と音、音節と音節、単語と単語、文と文とを、文法や統語と呼ばれる比類なき複雑さと独特さでつなぎとめた１つの網のようなものと考えてみよう。この網の編み方はDNAを初めとする身体的要因にも規定されているが、全てが身体的要因によって決定されているわけではない。そして、われわれはこの網にかかった意味やイメージを糧にして生きている。といって、言語の網を用いながら意味やイメージを集める主体が、網とは別に存在しているわけではなく、言語の網にいやおうなしに絡め取られる糧そのものが主体であると捉えたほうが正しい。

われわれはこの言語の網によって得た意味やイメージから構想を得て、網の結び目を解いては結びなおし、切れたところを繕いながら、常に新たな網を編みなおしていく。その言葉の網を新たに編みなおす作業は、さまざまな媒体を用いた「語り」にほかならない。そして、DNAを初めとする身体も、反復とズレによって、ゆっくりとこの網を編み変えていっている。

臨床心理面接では、セラピストはこの語りの媒体（声、身体、描画等）に配慮しつつ、併行してなされる語りの多様な次元（話される内容と声のトーンや身振り、描画のタッチと描かれる内容など）に気を配り、クライエントの日常に、特別な語りの場を設定する。この語りの場によって、クライエントは自身の網を、自身の生の境遇に、よりふさわしいものへと編みなおしていく。この生の境遇にはDNAによって生得的に規定されている身体的要因が含まれており、遺伝カウンセリングでは、その規定が前面に押し出され、意識される。そこでの言語の網を編みなおす作業は、ヒトの言語内の対話であるだけでなく、DNAという受肉された言語と、ヒトの言語という受肉されることのない言語との対話になるのである。ヒトの言語は受肉されることのない領域をもつ、という視点によって、われわれはDNAという受肉された神話をヒトという種の立場から、ある程度の融通をきかせながら解釈にとりくめる。解釈は読む行為になんらかのかたちで常につきまとう。ヒトの言語によって成立する心は、DNAの語りに支配されるだけでなく、DNAという文字を読むことで主体性を確保し、われわれはDNAという重荷に耐えていられるのだ。

７．あの世の欠落した神話

DNAという受肉した神話の負担に耐えるもうひとつの手がかりは、DNAの物語が本当に神話

足りうるかの是非を問うことであろう。その糸口は、神話がDNAとして物質化されてしまった点にある。物質という観点から見れば、あらゆる生物は死ぬと物質に戻り、その大部分は再び他の生物の中に取り込まれていく。この世が続く限り、いつまでもこの営みに終わりはない。生殖や細胞分裂によって絶え間なく続く自己複製の流れはこの世のものである。死ねば〈私〉は物質としてこの世に残る。物質の循環の中では、永遠の生命といっても、ひたすらこの世を生き続ける存在としての〈私〉であって、あの世の次元は関与しない。DNAの語る神話からはあの世が欠落しているのである。

DNAの示す神話に比べると、われわれの日々の生活のほうが、はるかにあの世を踏まえたものになっている。死体は無生物として微生物に分解される対象としては扱われない。人々は親しい人の死に際して、葬り、祈り、弔う。われわれの生には、苦しみや〈未知〉が必然的に付きまとう。憂き世を補い、救済するものとして人はあの世に思いを馳せる。DNAはもはや神話である。しかし、あの世のことが書かれていない神話を、われわれは本当に自分たちの根源を示す神話として受け入れるのだろうか。伝統的な神話を見てみても、例えばケルト民族の神話のように、創世神話の欠落したものもある（井村、1990）。本来はあったかもしれない創世神話が残されなかったり、あるいは他の神話体系の創世神話が肩代わりしたものと考えられているが、しかし、あの世や来世、異界を語らない神話は見当たらない。

DNAによって語られるあの世の欠落した神話が世界中で広く支持されることは、現在の心のあり方を反映している。河合（1998）は心理療法と身体性について論じつつ、「世界観の変化により、あの世という違った次元が消滅してきていることは、心理療法にとって心身の分裂よりも深刻な問題かもしれないのである。」というが、遺伝カウンセリングにおいてDNAについて考えてみる際にも、重要なことは、身体や言語ではなく、あの世の次元であるともいえるだろう。あの世は生物学や社会学によるDNAの読み方からはあらわれない次元である。DNAのしめす神話から欠落しているからこそ、〈遺伝子なるもの〉は逆説的にわれわれをあるとも知れぬあの世の次元に向わしめるようにも思われる。あの世、冥界、魂の次元は具体的に実体化してしまうと、この世のものになってしまう。DNAという、われわれの存在を示す物語を物質化したものに向かい合うと、はからずも、そこに欠如している魂の次元やあの世に向き合う態度があらわれてくるのではないか。そして、生物学が読み解くDNAでも、社会学が読み解くDNAでもない、心理学の独自のDNA解読があの世の次元から浮かび上がってくるのであり、この世ならざるあの世の次元を見据えることが心理学の独自性となると考えられる。もともと遺伝カウンセリングをおとずれるクライエントには、自然科学的な解決を目指す傾向があると考えられ、あの世のことが直接扱われることはないだろう。しかし、そのような場でこそ、クライエント・セラピストともどもあの世と魂の次元が一体なんなのかを根源的には問うているのではないだろうか。最初にとりあげたクライエントの抱える〈未知〉もこの世のものだけではなく、あの世との関連から捉える視点が心理臨床としては意味をもつのではないか。

遺伝カウンセリングにおける心理臨床学的アプローチを試み、〈遺伝子なるもの〉を検討したところ、DNAの登場によって、言語と聖典の身体化という事態が生じていることが明らかになった。そして、DNAによって指し示されない次元という形で逆説的にあの世を思い描くことになった。あの世の欠落した神話に対してわれわれの意識はこれからどう向き合うのか。われわれはあ

の世を個人の物語の中にどのように位置づけるのか、あるいはどのように位置づけないのだろうか。この問いはきわめて個人的であると同時に心理臨床的であると思われる。この問いの出現を本稿の結びとしたい。

付記：本研究は第31回遺伝カウンセリング学会学術集会での口頭発表をもとに、加筆修正を行ったものである。ご指導いただきました藤原勝紀先生、伊藤良子先生、そして日ごろよりお世話になっております京都大学医学部附属病院遺伝子診療部の皆様に深く御礼申し上げます。

【引用文献】

Darwin, C. (1868) The variation of animals and plants under domestication育成動植物の趨異 阿部余四男訳 (1937) 岩波書店

Dawkins, R. (1989) The Selfish Gene. 日高敏隆・岸由二・羽田節子・垂水雄二訳　利己的な遺伝子. (2006) 紀伊國屋書店

Freud, S. (1920) Jenseits des Lustprinzips. 須藤訓任訳　快原理の彼岸. (2006) フロイト全集17 岩波書店

Giegerich, W. (1985) Die Erlisung aus dem Strom des Geschenens:Okeanos und der Blutkreislauf. Gorgo 9, 35-55, 北口雄一訳　オケアノスの血液循環：出来事の流れからの救済 河合俊雄編集・監訳　魂と歴史性. (2000) 日本評論社

井村君江 (1990) ケルトの神話. 筑摩書房

伊藤良子 (2005) 遺伝医療と心理臨床. 伊藤良子監修・玉井真理子編集　遺伝相談と心理臨床. 金剛出版

河合俊雄 (1998) 概念の心理療法. 日本評論社

中村桂子 (2006) 自己創出する生命. 筑摩書房

Stevens, A. (2003) Archetype revisited: An Updated Natural History of the Self Inner City Books

【参考文献】

石館三枝子 (1998) 遺伝子. 岩波哲学・思想事典　岩波書店

伊藤良子 (2001) 心理治療と転移. 誠信書房

Marcus, G. (2004) The birth of the mind-How a Tiny Number of Genes Creates the Complexities of Human Thought.　大隅典子訳　心を生みだす遺伝子. (2005) 岩波書店

丸山圭三郎 (2002) 言葉と無意識. 講談社

中村禎里 (1973) 生物学の歴史. 河出書房新社

Stent, G.、Calendar, R. (1978) Molicular genetics. 長野敬訳　分子遺伝学(上, 下) (1983) 岩波書店

Stent, G. (1969) The Coming of The Golden Age. 渡辺格・生松敬三・柳沢桂子訳　進歩の終焉. (1972) みすず書房

T.A.Brown (1999) Department of Biomolecular Sciences UMIST, Manchester M60 1QD, UK 村松正実訳　ゲノム―新しい生命情報システムへのアプローチ. (2000) メディカル・サイエンス・インターナショナル

八杉龍一　小関治男　小谷雅樹　日高敏隆編 (1996)　岩波生物学辞典 (第4版)　岩波書店

The Clinical Psychological Approach in Genetic Counseling and the Gene archetype

(臨床心理実践学講座　博士後期課程3回生)

(受稿2007年9月7日、改稿2007年11月30日、受理2007年12月12日)

The Clinical Psychological Approach in Genetic Counseling and The Gene Archetype

YAMAMOTO Yoshiharu

This paper discusses what gene symbolizes through the examination of the psychological process and the clients' narrative in genetic counseling cases. The connection between the Gene archetype and "the death drive" by Freud, S., revealed that the repetition of the biological self-reproduction leads to self-creation in both the physical and psychological processes. Psychological process as a result of the repeated activity of body would be treated in clinical psychology. As the Gene archetype takes the form of DNA that is understood as the biological language, the discovery of DNA means the incarnation of language and the biological history that appears on DNA is the contemporary myth written in human bodies. However, the difference between the narrative of DNA and that of human, even though DNA is compared to language, makes it possible to interpret the myth of DNA and to communicate with DNA through the narrative in genetic counseling. Owing to the lack of the story of "the beyond" in the myth of DNA, "the beyond" could be the originality of psychology distinguished from biology and sociology.